



近代日本文学史

三好行雄編

有斐閣双書

近代日本文学史

三好行雄編



* 入門・基礎知識編 *

有斐閣双書

編者紹介

三好行雄 1926年生 1950年東京大学文学部
卒業
現在 東京大学文学部教授



有斐閣双書

近代日本文学史

昭和50年12月15日 初版第1刷発行
昭和56年3月20日 初版第8刷発行

編者 三好行雄

発行者 江草忠允

東京都千代田区神田神保町2~17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 株式会社精興社・製本 稲村製本所
© 1975, 三好行雄. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替いたします。

1391-097952-8611

は し が き

本書は大学および短期大学における近代日本文学史のテキストとして編まれたが、同時に、ひろく日本の近代文学に関心を有する読者のために、過不足ない史的展望を用意することをもめざしている。全体の構成(章立て)は編者の責任だが、各章の叙述は、それぞれの担当者の自由にゆだねられた。したがって、通史としては多少の重複や不統一をのこしたが、論理のダイナミズムを尊重して、あえて整序を避けた。

近代文学史の書きかえが提唱され、明瞭な自覚と化してから、すでに久しい。近代文学の研究自体が、戦後三〇年間に、質量ともにめざましい進展を遂げたが、個々の作家や作品に對する理解の深化とあいまって、それらを連続した時間の体系に位置づけるための試みも、方法論の模索とその具体化にむけて、ようやく着実な成果をあげつつある。西欧の〈近代〉を無謬の価値基準とみる信仰は、日本文学における〈近代〉の実質との整合性をすでに喪失している。日本の近代文学の風土と動態の内部にこそ、文学史を体系化する原理ないし価値の基準は見出されねばならないし、固有の文学伝統との連続と非連続を改めて、新しい視角で問うべき課題となっている。わが国の近代文学史をながく支配した、自然主義的文学史観

からの脱却もつよい要請である。

入門書としての性格を要求される本書は、もとより、右のような学的要請に、完全には対応できていない。しかし、なお所与の条件のなかで、可能なかぎり、文学史観の旧套を脱した新しい視点、新しい体系の提示にも意を用いたが、幸いに、編者の意図に賛成された執筆者の協力をえて、所期の成果をあげたと信じている。多忙の間に、力作を寄せられた各位に深甚の謝意を述べるとともに、刊行の遅延したことを御詫びする。また、有斐閣編集部の方、澤井洋紀氏にも、編集から上梓までの過程で、多大の援助を受けた。あわせて、感謝の意を表する。

昭和五〇年一月

三好 行雄

目次

第1章 過渡期の文学——近世から近代へ……………前田 愛 1

1 啓蒙期の思想と文学……………1

近世文学から近代文学へ(1) 幕末における「下の文学」(2) 「上の文学」の変貌(3)
幕末の思想と啓蒙思想(4) 明六社の思想的役割(6) 開化期の戯作(7) 柳北と撫
松(9)

2 政治小説と文学改良……………9

政治小説の発生(9) 『経国美談』と『佳人之奇遇』(11) 人情的政治小説(12) 翻訳
小説(13) 『新体詩抄』(14) 進化論と『小説神髓』(14)

第2章 近代文学の胎動……………前田 愛 17

1 明治二〇年代の文学……………17

「冷笑」型の青年(17) 二葉亭四迷と『浮雲』(18) 言文一致体の創始(19) 尾崎紅
葉と硯友社(19) 幸田露伴(21) 初期の鷗外(22) 文芸批評の発生(23) 北村透谷
と「文学界」(24) 樋口一葉(25) 正岡子規と俳句・短歌の革新(25)

2 明治三〇年代の文学……………27

日清戦争後の文壇(27) 嶺雲と樗牛(27) 悲惨小説・観念小説(28) 鏡花の世界(29)

社会小説(30) 蘆花と尚江(30) 天外・荷風とソライズム(31) 国木田独歩と自然の
発見(32)

第3章 文学的近代の成立

三好 行雄

1 反動の時代

規範性の崩壊(35) 小説様式の完成(37)

35

2 自然主義

自然主義の端緒(38) 自然主義の成立(40) 日本における〈自然主義〉(42) 花袋と
藤村(43) 秋声・白鳥・泡鳴(43)

38

3 反自然主義の文学(1)——漱石と鷗外・二葉亭

夏目漱石(1)——前期(46) 夏目漱石(2)——後期(47) 漱石文学の周辺(48) 二葉亭の文壇
復帰(49) 森鷗外(1)——明治四〇年代(50) 森鷗外(2)——歴史小説(52) 大逆事件と文
学(53)

45

4 反自然主義の文学(2)——耽美派の文学

永井荷風(54) 谷崎潤一郎(56) 「明治」の終焉(57)

54

第4章 市民文学の諸相——芥川を視座として

佐藤 泰正

1 大正文学への展望

はじめに(59) 有島の「二つの道」(60) 大正文学の概略(61)

59

2 白樺派と漱石——市民文学の一里程

64

大正文壇の新機運(64) 白樺派の登場(66) 武者小路実篤(68) 志賀直哉(69) 漱石と鷗外―『明暗』の意義(71)

3 大正後期の流れ.....73

「新思潮」の作家たち(73) 大正文学と私小説(74) 「話」らしい話のない小説」をめぐる論争(75) 自然主義の作家たち(77) 荷風・潤一郎・春夫(79) 私小説と通俗小説の隆盛(80) 「奇蹟」の同人と「新早稲田派」(82) 芥川の私小説批判(83) 大正より昭和へ―芥川文学の指呼するもの(84)

第5章 詩歌の〈近代〉.....三好 行雄 87

1 新しき詩歌の時.....87

「明星」の位置(87) 明治の象徴詩(89)

2 美神の系譜.....91

「明星」から「スバル」へ(91) 「スバル」の位置(93)

3 〈詩的近代〉の成立.....94

〈詩的近代〉の胎動(94) 口語自由詩の成立(96) 近代詩の諸相(99) 〈反近代〉の詩(101)

4 短詩型文学の〈近代〉.....103

短歌の〈近代〉(103) 近代俳句の展開(105)

第6章 転形期の文学―近代から現代へ.....佐藤 勝 107

1 労働文学から「種蒔く人」へ……………107

大正期労働文学と民衆芸術論(107) 「種蒔く人」の刊行(108)

2 有島武郎の死と関東大震災……………110

『宣言一つ』と有島の死(110) 大正末期の諸論争(111) 関東大震災と二つの世代(112)

3 「文芸戦線」と「文芸時代」……………114

「文芸戦線」と葉山嘉樹(114) 「文芸時代」・新感覺派(116)

4 大正から昭和へ……………117

マルクス主義文学へ(117) 林・中野の論争(118) 芥川と中野・川端(119) 昭和へ(120)

第7章 昭和文学の展開……………佐藤 勝

1 昭和期文学の発端……………121

新文学者の明るさ(121) 「私」の問題(122)

2 プロレタリア文学——ナップからコップへ……………122

ナップの創立(122) 芸術大衆化論争(124) 形式主義論争と芸術的価値論争(125) コッ

プへの再組織(126) 弾圧と組織解体(127)

3 モダニズム文学の種々相——非プロレタリア文学……………128

新興芸術派(128) ニ〇世紀文学(130) 小林秀雄(132)

4 文芸復興の気運——昭和一〇年前後……………133

昭和一〇年前後(133) 文芸復興期(134) 『私小説論』と『純粹小説論』(135) 「日本浪

曼派」と「人民文庫」(136) 転向文学(137)

5 戦時下の文学——暗い谷間……………138

文化統制と国策文学(138) 芸術的抵抗(139) 太平洋戦争下の文学(140)

第8章 戦後文学の動向……………大久保典夫 141

1 昭和二〇年代の文学……………141

「敗戦」と老大家の復活(141) 無頼派と既成文学の動向(143) 民主主義文学の展開(145)

「近代文学派」の活動(146) 戦後派文学の輪郭(147) 新文学への発展(150)

2 昭和三〇年代の文学……………151

思想界の動向(151) 「戦後批評」への反措定(152) 三島由紀夫その他(153) 既成文壇の確立(154)

3 昭和四〇年代以後……………155

繁栄社会とその危機(155)

第9章 詩歌の〈現代〉……………吉田 潤生 159

1 大正から昭和へ……………159

否定と解体の意識(159) 実在と抒情の分裂(160) 破壊と生命感の高揚(161) プロレタリア詩と詩的アナキズム(162) 物質のイメージと自我(164) 「詩と詩論」の「新精神」(165) 伝統との交点(166)

神」(165) 伝統との交点(166)

2 昭和一〇年代……………167

3	戦後詩の展開……………	173
	「近代」と「伝統」との乖離(167) 「四季」の詩人たち(169) 伊東静雄と中原中也(170)	
	「歷程」の詩人たち(171) 昭和一〇年代のモダニズム(172) 戦争詩の問題(172)	
	敗戦と戦後詩の背景(173) 戦後詩の出発(175) マチネ・ポエティクの運動(176) 「列島」の意義(177) 吉本隆明の登場(178) 抒情の系譜と広がり(179)	
付章1	演劇の〈近代〉と〈現代〉……………	183
	はじめに(183) ヨーロッパの近代劇(184)	
1	近代劇運動の誕生——文芸協会と自由劇場……………	185
	出発点の演劇状況(185) 文芸協会と自由劇場の誕生(186) 文芸協会・自由劇場の問題(188)	
2	築地小劇場……………	190
	築地の〈近代〉と〈現代〉(191) 築地における演劇と文学(192)	
3	「新劇」における昭和一〇年代……………	195
	プロレタリア演劇の位置と意味(195) 昭和一〇年代の史的位置(197) 〈近代〉の肯定の問題(198)	
	むすびに代えて——「新劇」の戦後……………	200
	二つの〈近代〉(200)	
付章2	大衆文学の〈近代〉と〈現代〉……………	203
	浅井清……………	

参 考 文 献	222
大衆文学の定義(203)	
『大菩薩峠』の意義(211)	
罪(217)	
戦後の大衆文学(219)	
大衆文学の母胎(204)	
小説の分裂(206)	
マス・メディアの発達と大衆文学(215)	
通俗小説の誕生(210)	
『宮本武蔵』の功	
近代日本文学年表	229

(写真提供) 日本近代文学館

第1章 過渡期の文学——近世から近代へ

前田 愛

1 啓蒙期の思想と文学

近世文学から
近代文学へ
北村透谷は『明治文学管見』(明治26)の中で、儒教倫理の束縛のもとに実用を目的とする武士の文学と、自由の意志ウイユルに誘われて快楽を追求する平民の文学とに分裂していた近世的文学像をあざやかに析出している。江戸時代の通念では幕府の官学として公認されていた朱子学を中心とする儒学が「文学」の首座を与えられ、戯作小説・俳諧・川柳・狂歌・浄瑠璃・歌舞伎などを含む俗文学は正統的な「文学」の埒外に置かれていた。江戸時代の「文学」は、哲学・思想・歴史など人文科学の諸領域にわたり、漢詩文や和歌・和文などを包含する広範な概念であって、それは今日の文学概念とは異質なものであったのである。このような近世的な文学概念は、明治維新後も根づよく残っていた。たとえば、福沢諭吉は『学問のすゝめ』の初編(明5)で次のようにいう。

「学問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽み、詩を作るなど、世上に実のなき

文学を云ふにあらず。これ等の文学も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古來世間の儒者和学者などの申すやうさまであがめ貴むべきにあらず。

これは「人間普通日用に近き実学」の必要を力説した福沢が、伝統的な学問の有効性に疑問をつきつけている個所であるが、ここにいう「文学」が戯作や俳諧などの俗文学を含んでいないことは明瞭であろう。明治文学研究の開拓者として知られる柳田泉は、このような「文学」を「上の文学」と名づけ、これに対する戯作や俳諧などの俗文学を「下の文学」と呼んで、両者が接近し、交流する過程のうちに明治の文学が形成されると説いたが、近代的文学像の輪郭は、経世済民の志を述べるが虚構性（小説性）を欠いた「上の文学」と、虚構性は具えているものの思想性に乏しい「下の文学」とに分裂していた近世的文学像が統一され、克服されていくところにかたづけられるのである。

幕末における では明治維新に先立つ幕末の激動期に、この二つの文学はどのような動きを見せ「下の文学」 たか、その簡略な見取図を描いてみることにしよう。

「下の文学」を代表する戯作小説の動向は、一一代將軍家齊が君臨したいわゆる大御所時代の繁栄と凋落に左右された。滑稽本の主要作家である式亭三馬が文政五年（一八二二）に、十返舎一九が天保二年（一八三一）に歿した後をうけて、天保期の戯作文壇でめざましい活躍を見せたのは、人情本の為永春水、合巻の柳亭種彦、読本の滝沢馬琴であった。凄艶な情痴描写と下町の風俗描写を特色とする春水の人情本は、大御所時代の淫靡な世相を背景に女性読者の人気を博し、種彦

の合巻『てむらさきいなかひんち修紫田舎源氏』(文政12・天保13)は『源氏物語』を近世化した趣向とあわせて、江戸城の大奥を連想させる歌川国貞の艶麗な挿絵が評判を呼んだ。また馬琴は家斉が薨ずる天保一二年(二八四二)に二八年の歳月をついやした畢生の大作『南総里見八犬伝』を完成させていた。しかし、大御所時代の終焉はとりもなおさず江戸戯作の死期を意味していた。家斉の死をきっかけにはじまった天保の改革は、風俗取締りの名のもとに春水・種彦らに仮借ない弾圧を加え、馬琴も絶筆を宣言して、戯作文壇は事実上壊滅に近い状態に追いこまれるのである。わずかに合巻のジャンルが種彦の歿後も『じらいやごう児雷也豪傑譚』『しらぬいものがたり白縫譚』などグロテスクな綺想を展開した長編を明治初年まで継続刊行してかろうじて面目を保ったにすぎない。

「上の文学」の変貌

幕末の激動とは無縁なところで細々と命脈をつないだ「下の文学」とはうらはらに、「上の文学」の変貌はめまぐるしかった。かつては無用の詩文に韜晦していた文人たちも、対外的な危機意識にめざめ、尊王論に鼓舞されて慷慨の文字を連ねることが多くなった。京洛の騒壇で重きをなしていた頼山陽が『日本外史』(文政10)で吉野朝の悲史を謳い上げたり、玉池吟社の総帥として江戸の漢詩壇に君臨していた梁川星巖が、最晩年に京都に赴いて尊王攘夷の運動に従事したりしたことは、このような文人の転身をもっとも端的に示している。「文学は却つて活動世界の従僕となりて、勤王家、慷慨家の名士をして其政治上の事業に附帯せしむるに至」(『明治文学管見』)だったのである。

儒学の領域では、封建的な身分秩序を支えてきた朱子学の体系が、急転する時代の要請に対し

ではまったく無力に近いことが暴露された。その変質と解体は、ほぼ次のような三つの方向から促進された。第一は、大塩中斎の『洗心洞劄記』(天保4)に見るように非常に処する心術の鍛錬を重視する方向であって、陽明学の内面性と実践性が、朱子学的な合理主義の擬制を摘発する武器として動員される。第二は、佐久間象山に見るように、西洋の学問を理解し、認識する手段ないしは媒介として儒学の諸範疇を読みかえて行く方向である。象山は朱子学の「窮理」と西洋の自然科学の方法とを等質のものと見なしたが、もともと自然・社会・人倫を貫通する原理であった「理」をこのように限定すること自体が、逆に朱子学の包括的な体系を解体させる反作用を伴うことになるのである。第三は、吉田松陰の『講孟余話』(安政3)に見るように、朱子学の名分論を最大限に読みかえ、政治変革のイデオロギーに転化させていく方向である。彼は孟子の易姓革命の思想に基づいて、超越者としての「天」を人格的な「天皇」におきかえる。天命に背いた桀や紂の放伐が肯定されるならば、天朝から政権を委託された幕府の権力も相対的なものとなるはずであって、そこから討幕の論理が導き出されてくるのである。なお幕末における尊王攘夷思想の母胎として、会沢正志齋の『新論』(天保元)に代表される水戸学や平田篤胤の提唱した古道学が大きな役割を果たしたことをつけくわえておかなければならない。

幕末の思想と啓蒙思想

明治元年(一八六八)から翌年にかけて戦われた戊辰戦争の戦火が収まると、明治の新政権は、「富国強兵」「文明開化」のスローガンのもとに、藩籙奉還・廢藩置県をはじめとして、学制・徴兵令の公布、太陽暦の採用など西洋諸国の政治体制や社

会制度をモデルとした一連の開明的な政策を打ち出し、近代的な統一国家への第一歩を踏み出した。三百に近い諸藩に全国を分割していた幕藩体制は、廢藩置県をさいごに崩壊し、士農工商の四民に峻別されていた身分制度の障壁も取り払われる。また電信・蒸気車・汽船などあいついで移植された西洋の文物は、機械文明の威力と効用を民衆にもまざまざと印象づけた。いわば明治の人びとは、鎖国時代の閉ざされた世界から、西洋の近代に通ずる開かれた世界へといっきに引き出されたのである。このような新時代にふさわしい人間のあり方、ものの見方を普及させようと努力したのは、西洋の思想や文化をわが国に導入する使命感にもえたとはいえた明六社めいくくしゃの洋学者たちであった。

明六社に結集した知識人に課された思想的役割のひとつが、「上の文学」の変革、とりわけ儒教的思惟方法の独断性と観念性を暴露し、現実の社会的実践にむすびついた知識の体系を確立することにあったことはいまでもない。「虚学」から「実学」への転回である。そのかぎりで幕末における儒学の解体作業は、彼らの登場を容易にする地ならしの役割を果たしたといえることができるが、にもかかわらず、幕末の思想家と明六社同人とのあいだには一線が画される。幕末の思想家の場合、佐久間象山の「東洋道德 西洋芸術」という有名な言葉に示されているように、東洋の精神文化（儒教）を基礎にした西洋の物質文明（科学技術）の摂取という使い分け方式が堅持されていたのが普通であったが、明六社の同人は、儒教の束縛から解放され、西洋の物質文明の背後にある哲学・思想・社会科学からの直接的な影響のもとに自己の思索を展開しえた世代で